

アカデミア メランコリア (若手のコラム)

国立極地研究所 田村 岳史

札幌で開催された秋学会に参加したら、松田くんの華麗な話術に嵌まってしまい、何故かこのコラムを引き受ける事になっていました。僕も3月に35歳になるので、もう若手という感じでは無いだろうと、お断りしていたはずなのですが、さすが松田くんです。いつの間にか引き受けるのが前提の話になっていました。日頃、さんざんイジってきたツケがまわったのかもしれませんが。

さて、何を書こうかと年末年始に考えていたのですが、なかなか適切な話題が浮かびません。男風呂に行ったら若い長髪の後ろ姿に出くわして「なんて自分はラッキーなんだ」と思ったら羽角さんだったという話にしようか、「荒川静香が金メダルを取れる事を自分が何故事前にわかってたのか」を力説していた須賀さんの話にしようか、同窓会で嫁探しをするのがいかに素晴らしいかを情熱的に語っていた見延さんの話にしようか、当時学生だった渡邊さんに「世界の大島と一緒に研究ができてお前は幸せだな」と自分で言ってしまったあの話にしようか、といろいろ考えてはみたものの、海洋学会の重鎮の方々を売り飛ばすような話ばかりだったので、これらの話はやめておこうと思います。他にも坂本さんの〇〇〇〇ソムリエの話とかもあったのですが、これも別の機会にしておかないと後で大変な事になる気がします。なので、ここは無難に、私がオーストラリア南極観測隊に参加した時の話でも書いておこうかと思います。

私はこれまで、2003年・2007年・2012年の3回にわたってオーストラリア南極観測隊に参加してきました。海氷域の観測がメインの航海だったので、全て砕氷船及び海氷上の観測でした。どの観測も困難の伴うもので、楽な航海というのは無かったのですが、一番大変だったのはやはり最初の航海でした。研究者・船員合わせて100名弱が乗船していたのですが、私が唯一英語を話せない人間で、とても惨めな思いをした事が今でも思い出されます。忘れられないような惨めな思いをしたはずなのですが、人の記憶というのは時の経過によって薄れるもので、2006年に次の航海に参加しないと誘われた際に脊髄反射で「喜んで」と答えてしまいました。後で冷静になってもう一度考えてみた時に、自分の英語力が2003年から全く進化していない事、そしてそれは2003年での惨めな思いが2007年でも再現されるという事に気づき、大きな危機感を抱いた私は、すぎる思いである英会話学校に通う事に決め、一年以上通いました。そのレッスンでたまに一緒になったある女性が、実は同じ高校出身で、さらに同じ学年で、そして在学当時は全くお互いに面識は無かったのですが、3年生の時は隣のクラスである事が判明して、仲良くなり、その人と結婚して、今は子供が二人になりました。南極観測で支障の無いように英語力を身につけようと思ったら、ついでに妻もゲットしましたという話でした。前述の見延さんと気が合うのかもしれませんが。

さて、次のコラムですが、物理系が続いてしまいましたし、男ばかりなのもつまらないですし、もっと若いの方がよろしいかと思っています。意欲的で情熱のある方に心当たりがありますので、その方に次をお願いしようかと思います。



JOS News Letter

JOS ニュースレター
第3巻 第4号 2014年3月1日発行

編集 JOSNL 編集委員会

委員長：津田敦 委員：小守信正、根田昌典、田中祐志

〒277-8564 千葉県柏市柏の葉5-1-5

東京大学大気海洋研究所

電話／FAX 04-7136-6172

メール tsuda@aori.u-tokyo.ac.jp

デザイン・印制 株式会社スマッシュ

〒162-0042 東京都新宿区早稲田町68

西川徹ビル1F

<http://www.smash-web.jp>

発行



日本海洋学会
The Oceanographic Society of Japan

日本海洋学会事務局

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋1-1-1 パレスサイドビル9F

(株)毎日学術フォーラム内

電話 03-6267-4550 FAX 03-6267-4555

メール jos@mynavi.jp

※今号の表紙写真は、JAMSTEC から提供いただきました。